



波頭を疾走する少女

松本 侑壬子・ジャーナリスト

宮崎駿監督の4年ぶりの新作アニメ。アンデルセン童話『人魚姫』を下敷きに、現代日本の5歳の少年宗介と少女ポニョの愛と冒険の物語である。

『人魚姫』の王子は、人魚姫を一度は愛してもやすやすと周囲に流され、愛を忘れるが、宗介はポニョを「好き」と思うと何があっても守り抜く。実はポニョは、元は魚の子。磯に打ち上げられ宗介に助けられてから、人間の宗介と一緒に生きたいと願い、意思を貫くのだ。そのためには、海の魔法使いである元人間の父親に背き、ポニョポニョした魚の体から自力で人間の姿に変身し、人間としての生活に慣れなければならない。

ポニョはそれをやるのである。父親の監視の目をかいくぐり、自らの胴体のヒレや尻尾の部分から手と足をムグッと渾身の力で生やすのだ(まるで妊婦が子を産むときの頑張りのように)。求めるものがあるときに、他人を当てにして待っているのではなく、自分で獲得する。自分の生きたい人生は自分で勝ち取る一思わずこんな感慨が湧き起こるのは、つい先日、東京・秋葉原の連続殺傷事件の犯人・25歳男性の、あまりにも不甲斐ない犯行動機に衝撃を受けたからかもしれない。

赤いドレスに白いパンツの行動派少女ポニョは、『アルプスの少女ハイジ』『魔女の宅急便』『風の谷のナウシカ』といった“カワタクマシイ(可愛く嬉しい)”宮崎アニメの少女ヒーローの系譜を受

け継いでいる。ディズニーのきれいで素直な“待つ女”イメージのプリンセスたちとは違うのだ。

突き出た岬の「崖の上」には宗介の家がある。船長の父はいつも不在だが、父の船が沖合を通るときには両親は光で「愛してる」「バカ!」などと交信する。母親は海辺の町の宗介の保育園に隣接の老人施設「ヒマワリノイエ」で働いており、毎朝ミニカーに宗介を乗せ海沿いの道を猛スピードで通勤する。

ある可愛らしいエピソードで互いに“一目ぼれ”した宗介とポニョの小さな愛の行方は、波乱万丈。極彩色の生物が生きる美しい海の底から港や水辺の風景、あるいは岬の家と2人の姿を追いながら、生き生きと目の覚めるように展開する。とりわけ、ポニョの父親の魔法で引き起こされる大洪水の場面は圧巻だ。初めは粟粒のようなポニョの妹たちが、次々に巨大な水魚に変身、無数の水魚がひしめきながら荒れ狂う大波となって押し寄せる。その波の上を赤いドレスの小さなポニョが全速力で疾走する。古事記にあるワニザメの上を跳び渡った因幡の白ウサギ、ニュージーランド映画『クジラの島の少女』で見た伝説の鯨の背にまたがり沖へ乗出した少女・・・時空を超えてそんな大らかなイメージにつながる爽快な場面である。

宗介の町が次第に水の底に沈んでいき、消防や救護隊の行き交う非常時の賑わいをよそに、透明な水中の町は異次元の美の世界を形成している。ボートから見下ろす町のたたずまいは、まるで上空の飛行船から見下ろす日常の風景のようだ。そこにいつの間にか古代魚が現れて泳ぐというシュールな画面。海を鎮め、洪水から町を救ったのは、母なる海の女王の力だ・・・。

ポニョの顔は、始めは両側にまん丸な目玉があって、まさに魚の顔。それがやがて、人間の女の子の顔になり、母親に「どんなに苦しくても、人間になる」と誓った後は、もう立派な一人前の顔だ。現代の人魚姫は、あくまでも元気印である。

『崖の上のポニョ』

日本映画(101分)／宮崎駿監督

全国東宝系にて公開中

© 2008 二馬力・GNDHDDT

